

戦後台湾の建築における日本植民地経験の影響：本省人建築家・陳仁和のRC造による木造擬態表現に注目して

Research on the Influence of Japanese Colonial Era on Post-War Taiwanese Architecture: Focusing on the Wooden-mimicry Representation through Reinforced Concrete by Taiwanese Architect Chen Ren-he

明治大学理工学部建築学科 助教 市川紘司

（研究計画ないし研究手法の概略）

本研究では、戦後台湾で活躍した本省人建築家の陳仁和の建築について、文献調査、図面調査と建築調査、聞き取り調査から分析を行った。文献調査では、関連する先行研究レビューを行い、陳仁和を含む本省人建築家を取り巻く戦後台湾社会及び建築界の状況を検討した。図面調査と建築調査では、台湾南部の高雄・屏東に現存する4棟の建築作品を視察し、国立台湾博物館にアーカイヴされる図面資料を用いながら、本研究が注目する「高雄三信家事商業學校波浪大樓」の木造的表現の陳作品譜における比較分析を行った。聞き取り調査では、陳仁和と協働した吳甲一氏の関係者三名に聞き取りを実施し、「波浪大樓」の設計意図や作業環境に関する分析を行った。

（実験調査によって得られた新しい知見）

1. 文献調査

1-1. 戦後台湾建築史研究

戦後台湾に活躍した建築家の陳仁和に着目する本研究では、関連する先行研究レビューをまず行った。近年、台湾では戦後建築史研究が活発化している。国立台湾博物館は2007年に戦後の台湾で活躍した建築家の図面資料類を収集するアーカイヴ・プロジェクト（「二次戦後台湾經典現代建築設計図說徵集研究計画」）を始め、すでに10万点を超える資料が収集されている。集まった資料は王大閔や漢寶徳といった台湾の著名建築家のものに加えて、丹下健三の「聖心女子大学」（1967年）やゴットフリート・ベームの「臺南菁寮聖十字架天主堂」（1960年）といった外国人建築家によるプロジェクトの図面資料も含まれる。このアーカイヴプロジェクトの概要や進捗については、当該博物館編集による調査報告書籍¹や、資料が収集されたプロジェクトの現状把握を行なう林一宏²による調査研究から理解することができる。

以上のような戦後台湾建築家に関する研究調査と並行するかたちで、2000～2010年代には様々な研究成果が出されている。多いのは、個別の建築家にフォーカスを当てた作家論的研究であり、そうした研究によって戦後台湾建築界を構成した主要アクターの経歴や学歴、主な作品、デザインの傾向といった基本的な情報を把握できる状況となっている。例えば、国民政府の外交部ビルや教育部ビル、あるいは「国父」である孫中山（孫文）の記念モニュメントである国父紀念館などを手が

¹ 吳光庭・王俊雄・謝明達編著『國立臺灣博物館二次戰後臺灣經典建築設計圖說徵集研究計畫報告書』国立台湾博物館，2011。

² 林一宏「二次戦後台湾現代建築圖說徵集數位化計劃中建築物現況調查計劃（一・二）」

けた王大閔への注目度は高い。徐明松³や郭聖傑⁴による研究を始め、文学など建築設計に留まらないその多面的な活動を論じる論文集⁵が刊行されている。2017年には「建国南路自邸」（1953年）が再建され【fig. 1】、2019年には回顧展（「國父紀念館建築文獻與王大閔先生逝世周年紀念特展」2019年5月16日～6月9日）が組まれた。また、王大閔の他には、市立東海大学のキャンパス計画で知られる陳其寬⁶、世界デザイン会議への出席後に佐藤武夫事務所や前川國男事務所で実習をした高而潘⁷、また蔡柏鋒⁸、陳仁和⁹、李重耀¹⁰らに対する建築家研究が発表されている。また、徐明松・王俊雄¹¹による研究では、上記研究群が対象とするような1950～70年代の台湾社会で活躍した建築家を、戦後に「移植」されたものを「第一世代」、戦後台湾の教育機関で建築教育を受けたものを「第二世代」とし、「第一世代」の主要建築作品を検討している。



Fig. 1 建国南路自邸

1-2. 戦後台湾建築界の構造

日本敗戦後の台湾は、中華民国の施政下に置かれる（「台湾光復」）。その社会を構成するアクターは大別すると、大陸の国共内戦を逃れて台湾にやって来た「外省人」、その以前から台湾に住まう「本省人」、そして漢人入植以前から台湾に暮らしていたオーストロネシア系言語を母語とする人びとの子孫である「原住民」に分かれる。沼崎一郎は17世紀のオランダ統治時代から清朝、日本植民地時代、そして「光復」後の戦後まで、台湾社会には「二元・二層構造」がかたちを変えながら存在すると指摘している。戦後台湾で言えば、それは「支配者」としての外省人と「被支配者」としての本省人（台湾出身）及び原住民という支配／被支配の「二層構造」、そして「被支配者」の内側における本省人と原住民という「二元構造」であった¹²。

戦後台湾社会の大きな部分を構成する漢人内における本省／外省という区分は、建築業界においても基本的に当てはまる。政府関連の公的プロジェクトなど大規模建築には本省人建築家が関与することは少なく、彼らは民間のより小規模な建築を生業としたことは、多くの研究が指摘する基本的フレームワークである。徐明松・王俊雄による上記研究では、1950～70年代台湾を代表する建築作品30棟を取り上げているのだが、そのうち台湾生まれの建築家によるものは「高雄三信家事商業學校學生活動中心」「高雄三信家事商業學校波浪大樓」（設計：陳仁和）及び「台南神學院頌音堂」（設計：林慶豊）の3棟に留まっており、当時において外省人建築家の占める地位の相対的な高さ／大きさが伺える。もちろん、こうした不均衡は、徐明松¹³が指摘するように、植民地時代の台湾及

³ 徐明松『王大閔：永恆的建築詩人』木馬文化，2013。

⁴ 郭聖傑「台湾建築家王大閔の論考にみられる主題と構成の特性及びその変遷についての一考察」、『日本建築学会計画系論文集』78(693)，2013，pp. 2399-2407。／郭聖傑・田路貴浩「中国文化復興運動における王大閔の「人類登月記念碑」案について」、『日本建築学会計画系論文集』81(727)，2016，pp. 2071-2081。／郭聖傑・田路貴浩「王大閔の住宅作品における中國性」、『日本建築学会計画系論文集』82(738)，2017，pp. 2097-2104。

⁵ 郭肇立主編『世紀王大閔』典藏藝術家庭，2018。

⁶ 東海大学建築系編『建築之心：陳其寬與東海建築』田園城市，2003。

⁷ 徐明松・劉文岱『走向現代：高而潘建築的社會性思考』木馬文化，2015。

⁸ 徐明松『蔡柏鋒：不帶偏見的形式實驗者』木馬文化，2012。

⁹ 柳青熏『不連續の現代性：陳仁和の時代與他的建築』成功大学修士論文，2017。

¹⁰ 李重耀・林敏哲・李學忠『桁間巧師：李重耀の建築人生』重耀建築師事務所，2003。

¹¹ 徐明松・王俊雄著『粗獷與詩意：台灣戰後第一代建築』木馬文化，2008。

¹² 沼崎一郎『台湾社会の形成と変容：二元・二層構造から多元・多層構造へ』東北大学出版会，2014。

¹³ 徐明松「台湾戦後建築的現代性歷程」、『dA 11：現代性擦拭的艱難』田園城市，2011，pp. 81-100。

び日本で学んだ建築家に対する基礎的情報が未だ不足しているために生まれている可能性を留保しておく必要はある。また、例えば郭文亮¹⁴は、戦前植民地時代における実務重視の建築教育を受けたことで、本省人建築家らは、方法や表現に思想をもつ「学院派」としての外省人建築家とは異なるかたちで民間により深く入り込めた、と指摘する。あるいは、台湾の建築雑誌『建築師』の1984年7月号は戦前戦後から活動する「元老建築師」の特集を組んでいるが、その座談会が外省人と本省人で二分されて実施されている。外省人座談会は「内地から台湾へ：回顧と将来」、本省人座談会は「日抛・光復・現在」というように、そのタイトルだけでも両陣営が向き合う文脈や社会的状況が鋭く異なることが分かる。

2. 陳仁和の建築調査

2-1. 経歴

陳仁和は、以上の文献調査で理解された文脈のなかで、戦後台湾に数少ない本省人建築家を代表する存在として近年注目度を高めている。柳青熏『不連続的現代性：陳仁和的時代與他的建築』（成功大学修士論文，2017）は、陳の経歴から主要作品までをレビューした上で、近代台湾が歩んできた「不連続」の近代化プロセスを体現する建築家として描出する。また柳らの主導によって、国立台湾博物館がアーカイヴする建築図面や模型を中心とする回顧展が最近同館にて開催された（「前行無畏：陳仁和的建築時代」2018年11月27日～2019年4月21日）

【fig. 2】。

陳仁和の略歴は以下の通り。1922年澎湖吉貝島生まれ。1931年に台湾本島屏東市に移住する。1940年に日本に留学して大学予科で学んだのち、早稲田大学専門部建築学科に入学し、内藤多仲らに学んだ。1944年卒業。第二次大戦後に台湾に戻り、高雄工業職業学校、台湾省公産管理処、台北市政府

工務局、台北市政府日産清理室などに務めたのち、1951年に高雄市に陳仁和建築師事務所を開設した。1967年に「金鼎獎十大建築師」を受賞。1979年に「高雄市建築師公会」が成立すると常務理事となる。1989年11月、急性敗血症により逝去。

2-2. 図面調査と建築調査

本研究では、高雄屏東エリアに現存する陳仁和による4つの建築作品——「屏東東港天主堂」（1960年）、「高雄佛教堂」（1955年）、「高雄三信家事商業學校波浪大樓」（1963年）、「高雄三信家事商業學校學生活動中心」（1963年）——の視察調査を行った【fig. 3-6】。「東港天主堂」は二枚のプレートによる大屋根がダイナミックに架かる一室空間の教会堂である。「高雄佛教堂」は中央に高くそびえる塔とその左右に背の低い鐘鼓楼がシンメトリーに配置される仏教寺院である。「波浪大樓」は、波のように上下に揺れる外廊下のファサードが特徴の学校校舎である。「學生活動中心」は細いプロポーションによるフレームで外観が構成されており、頂部に設置された高塔は学校のシンボルともなっている。

以上の作品のなかで、とりわけ目を引いたのが、「波浪大樓」における小梁に支えられたキャンテ



Fig. 2 前行無畏：陳仁和的建築時代

¹⁴ 郭文亮「一半的建築：有關日治台灣建築認知的一些推想」，『dA夯11：現代性擦拭的艱難』田園城市，2011，pp. 61-79。

イレバーの極薄スラブの表現である【fig.7】。鉄筋コンクリート（RC）造による建築だが木造的な軽さと薄さを目指した表現だと言えるだろう。同時代の日本では、丹下健三の「香川県庁舎」（1959年）に代表されるように、伝統的な木造建築のプロポーションやイメージを、コンクリートを用いて実現する建築作品があるが、陳仁和の「波浪大樓」はそれらと相似な試みをしていたのである。台湾と日本で同時代的な影響関係が存在していたとしたら興味深い。なお「學生活動中心」のファサードにも同様のデザインが見られた。



Fig. 3 屏東東港天主堂



Fig. 4 高雄佛教堂



Fig. 5 高雄三信家事商業學校波浪大樓



Fig. 6 高雄三信家事商業學校學生活動中心



Fig. 7 波浪大樓の外部廊下

国立台湾博物館には陳仁和の約50の建築プロジェクトに関する図面アーカイヴが構築されており、本研究では、林一宏研究員の協力を得ながら閲覧することができた。限られた時間のなかでの調査ではあったが、「波浪大樓」のような小梁+極薄スラブの表現の類例はなかった。陳仁和建築はRC造によるものがほとんどであり、基本的には近代的な機能主義や合理主義のマナーに従った空間構成と意匠をとって、そのなかで階段などに躍動的な造形を施す、という傾向がある。よって「波浪大樓」の木造擬態的な表現は、陳仁和作品譜の全体を貫く特徴というよりも、このプロジェクトに例外的に採用されたものであると言える。

アーカイヴ資料が明らかにしているように、陳は多くのプロジェクトにおいて自ら手書きで構造

計算を行っている。「波浪大樓」の薄いスラブによるキャンティレバーや「東港天主堂」の大屋根など、構造的なチャレンジがそのまま建築デザインの要となっていることは、設計と構造を並行して思考したゆえのものだろう。ただし、「波浪大樓」では端部に重量のある手すりと一体化したベンチを設けており、合理的とはいえない。RC造の実際とは別に、木造の軽やかな手すりなどをイメージしていたがために生まれた矛盾だと考えられる。

2-3. 聞き取り調査

陳仁和が構造的なデザインを志向した背景のひとつには、戦前の早稲田大学での学習経験が挙げられるだろう。陳は戦前に台湾から日本に渡って早稲田大学で建築教育を受けた数少ない本省人建築家の一人であり¹⁵、そこで「建築装飾」や「日本及東洋建築史」といった建築意匠や建築史に加えて、内藤多仲らが教える「鉄筋コンクリート構造」や「耐震構造学」などの構造の講義を受講した。陳仁和は自らの思想や手法を文章のかたちでほぼ発表しておらず¹⁶、また教歴もないことから弟子筋に当たる人物もいないため、留学時に学び得た知識が後年の作品にどれほど反映されていたのかを直接的に理解することは難しい。だが、戦後台湾建築史研究者の多くは、陳仁和の作品から日本の影響を読み取っている。例えば、上記の柳青熏は、「高雄佛教堂」の奥行き深い空間構成や三つの塔が並ぶファサード意匠に、伊東忠太の東洋建築史からの影響を指摘している。

本研究では、陳仁和における戦前の学習経験と戦後の活動の連続性を考えるために、高雄の黃琬雯氏（元智大學）と黃連進氏（高雄市建築師公会）の協力を得ながら、関係者三名（林炳炎氏、謝中原氏、張銘鋒氏）への聞き取り調査を実施した【fig. 8】。

三名はいずれも、高雄の施工会社である「甲一營造」の呉甲一氏と生前関わりのあった関係者である。呉甲一氏は、陳仁和と同じ澎湖出身であり、「波浪大樓」を含む幾つかの建築作品の施工を手がけた。三名の証言から、以下のことが分かった。陳仁和事務所は小規模で3, 4名程度のスタッフで構成されており、設計図面を忠実に施工することを強く求める建築家であったこと；スタッフは高雄高工出身者が多かったこと；「波浪大樓」は当初木造で建てることが検討されており、現在



Fig. 8 張銘鋒氏への聞き取り調査

のようなRC造による木造的表現はその最初のイメージがあった可能性が高いこと；その木造擬態的表現と同時代の日本建築との影響関係については、当時高雄の港湾関係を担当する建築事務所には予算も潤沢で『新建築』など日本の建築雑誌が多く購入されており、またいわゆる海賊版も多く流通しており、日本語の読める陳仁和は多分にそれらを参照できる環境にあったこと等である。

（発表論文）

（今後発表の予定）市川紘司，戦後台湾建築における日本植民地時代の影響——陳仁和の「波浪大樓」に着目して，2021年度日本建築学会大会学術講演会

¹⁵ 戦前の早稲田大学における建築教育部門は、大学理工学部、専門部理工学部、工手学校、高等工学校の4つに分けられるが、陳が学んだのはこのうちの専門部理工学部である。そのほか戦前にこれらで学んだ台湾人留学生は以下のとおり。林慶豊、朱孝存（大学理工学部）、廖上焜、陳經緯、黃基統（以上専門部）、洪順孝（工手学校）陳再傳（高等工学校）。参照：柳青熏『不連続的現代性：陳仁和的時代與他的建築』成功大学修士論文，2017，p43。

¹⁶ 陳仁和が発表した文章として現在確認できるのは『台灣營造界』（1947年）における「一個建築家的私見」のみである。